2011.10

かがやく KAGAYAKU 33

生涯学習情報紙：生きがい探しのパートナー

感動人生！ ここに生きる元気な入間人（ひと）

編集・木版 西野一男さん

▲宇宙ステーションと交信したアンテナと無線機

▲キーを叩くクラブ員

▲親子連れで楽しい講習会

▲クラブ員の交信を見守る吉野さん

■無線クラブ　吉野正昭（よしのまさあき）さん（49歳）（新久）

夢を世界に広げよう

「ハロー CQ CQ こちらはJK1ZAM入間市児童センター無線クラブです。お聞きの方がいらっしゃいましたら交信をお願いします」

無線クラブ代表の吉野正昭さんをはじめ、見守るボランティアの暖かいまなざしを背中に受け、無線室は交信相手に呼び掛ける子どもたちの声で賑わいます。今日は無線クラブの活動日です。

入間市児童センター無線クラブは、昭和62年のセンター完成の翌年、子どもたちに理科への関心を深めてもらおうと設立されました。20年以上の歴史を持つ無線クラブは、平成13年に日本で初めて、地球を周回する国際宇宙ステーションと交信をするという、輝かしい記録を持つ無線局です。

吉野さんは、お子さんが無線クラブにいたことがきっかけでボランティアを始めましたが、すでにJJ1UAPのコールサインで開局していました。

「仕事の関係でドイツに単身赴任をしていた時は、留守を守る家族とアマチュア無線を利用して連絡を取りあって、電話代の節約に役立ちました。また、同じ趣味を持つ現地の人たちとすぐに友達になれました」と笑いながら話してくれました。

毎週日曜日の活動日には、吉野さんを中心に市内のアマチュア無線の愛好家10人ほどがボランティアとして指導にあたっています。

吉野さん達は、アマチュア無線の免許取得者を養成するために毎年講習会を開いています。講習会では独自の分かりやすいテキストを使い、ボランティアが交替で指導にあたっています。今日も女の子を含む6人が、目を輝かせて熱心に講義に聞き入っていました。

吉野さんは「無線を通じて世界の人たちと話が出来る面白さを知ってもらい、また無線を通じて理科離れを防ぎたいと思っています。ただ、無線通信は相手の顔も見えず、知らない人と話すこともあります。加えて電話と違って傍受されることもあるので、単に技術を覚えることよりマナーを大事にすることを教えています」と説明してくれました。

未知の人との触れ合いを求めるクラブ員の声を聞かれたアマチュア無線愛好家の方、ぜひお相手をして夢をかなえてあげてください。

＊アマチュア局に割り当てられる呼出符号

■市子連郷土かるた指導者　梅陽子（うめようこ）さん（扇町屋）

「負けて泣き、勝って泣き」かるたを通して絆を育む

埼玉県かるた大会で強豪と言われる常勝入間市。個人、団体とも毎回6位までの入賞者を輩出しています。

平成18年度の第25回大会では団体部門で1位2位を独占。平成20年度には個人・団体W（ダブル）優勝も果たしました。翌年の第28回でも個人優勝を獲得。元気一杯の子どもたちが果敢に頂点目指して結果を出しています。

地区大会から市大会、そして県大会へと代表選手を育み導いているのが市子連（入間市子ども会育成会連絡協議会）のかるた部門を担当している梅　陽子さんを始めとした役員の皆さんです。

5年前に梅さんが立ち上げた、郷土かるたサークル『カルティッシモ』は、学年を問わず多くの子どもたちの居場所にもなっています。

「誰にでもできるところがかるたの魅力なんです。46枚の絵札を記憶し、郷土を学び、集中力を高めていく…。レベルの高い子が追いつけ追い越せと、上を目指して挑んでいきます。負けず嫌いの子が多いですね。」

「そしてあきらめない気力、自分で考えて判断する力を養います。くやしさが力になる、ほめてやれば自信がつく。私はアドバイスするだけ。私の家族の様なものです。」

また、先輩後輩の繋がりやジュニアリーダーの存在も大きく、目的達成のための絆も培われていきます。

負けて泣き、勝って泣き、日々過しくなっていく…。「がんばれ入間っ子！」を合言葉に、子ども達は夢に向かって気力をみなぎらせています。

▲憧れのトロフィーを手にして（平成20年度）

▼集中力！ 記憶力！

▶瞬発力！ 気合いを込めて…

市制施行45周年記念事業

第17回いるま生涯学習フェスティバル

テーマ　まなびの市場 ～まなびを活かそう、ひろげよう!!～

生涯学習してみませんか？　まなびのきっかけを見つけに来てみませんか？
色とりどりの品物が並ぶ市場のように、たくさんのまなび・楽しさをご用意しています！

日時：平成23年12月4日（日）
午前9:45～午後3:45
場所：入間市産業文化センター
図書館・児童センター等

共催：入間市・入間市教育委員会
（財）入間市振興公社
入間市生涯学習をすすめる市民の会
主管：第17回いるま生涯学習フェスティバル実行委員会

◉編集後記◉

●春・夏・秋・冬　日本には、素晴らしい四季があります。これらの雄大な自然を大いに満喫したいものです。（H）

●やっと終わった、ふーと深呼吸。早いものでもう10月だ。小生の筆もやっと安らぎのときを迎えることができた（I）

●家の前でミミズの真れな姿を見ました。地中の暑さに耐えきれず地上にでてきたようです。開発と人類のエゴによる地球温暖化の犠牲でしょうか？自然を大切にしなければいつかは仕返しが（MK）

●何かに夢中になっている時、人は自分が生まれてきたことに感謝し、その喜びと幸せを感じます。それが愛であれ、仕事であれ、学びであれ。（N）

●空気・水・生物、自然全てが私達の生命も心も育んでくれているのですね。経済効率だけを追うのではなく、自然に感謝し、大切にしていきたい。（SM）

●目標を持ちその達成に費やされた努力の成果を自らのものだけとせず、さらに広めようとする姿に今回も感動を覚えました。今後もこうした事例を数多く紹介していきたいと思います。（ST）

企画編集：「かがやく」編集委員会
発行：入間市教育委員会生涯学習課

お問い合わせ　入間市教育委員会生涯学習課
連絡先　〒358-8511　入間市豊岡1-16-1
TEL 04-2964-1111（内線4123）　FAX 04-2964-4841

編集委員（五十音順）　猪俣克己　柴藤美恵子　芝原武　西垣寿夫　横木敏子　森邦夫

■スクラップパーティ代表 西村沙乙里（にしむら さおり）さん（仏子）
スクラップブッキングに魅せられて

人は写真によって「あの時・あの頃」の想いに触れることができます。この時にファインダー越しに観た撮り手の想いや気持ちを感じとれれば、それによって受ける感動はひとしおのことでしょう。

この想いや気持ちを文章やイラストにして写真に添え、リボンや造花などでカラフルに装飾するアルバム作りの手法を**スクラップブッキング**といいます。

西村沙乙里さんは友人を介してスクラップブッキングを知りました。子育て真っ最中で自分のために使える時間は少ししかない中、寸暇を惜しまず手法を学んだ頃を「思い返してみると予想以上に大変だった」と言います。そんな経験から「子どもや自分のためになって、その上手軽に学べるとしたら、興味を持つ人も、輪に加わる人も多くいるはず」と、設立したのが『スクラップパーティ』という愛好会で、仲間と一緒に作品作りを楽しみながら、初心者の指導にもあたっています。

西村さんは作製にあたり、「メインはあくまで写真」と言い切ります。あまり装飾をしすぎると、写真はもちろん、それに添える想いや気持ちも弱まると考え、その点に気を配り指導しているそうです。参加人数も毎回20～30人だそうで、活動を通して出来た友人も沢山いるとのことです。取材に伺ったのはうだるような暑い日でしたが、お子さんをあやしながら和気あいあいと作品づくりに没頭する、大勢のママさんの姿を目にしました。

これからもスクラップブッキングのことをもっと大勢の人に知ってもらいたいとして、地元百貨店や地域イベントを利用した展示会を開催、さらにその輪を拡げようと奮闘している西村さんです。

▲作製中のママさんたち

▲▶作品に想いを込めて

■木彫 林田種雄（はやしだ たねお）さん（72歳）（野田）
木彫にほれて40年

「子どもの頃から、気がつけば木や竹を細工して遊んでたな」と話す林田さん。独学で木彫を始めてから40年程になります。

社寺建築に携わっていた30代の頃、建築彫刻師が廃材を利用して仏像を彫っているのを見て、自分もやってみたいとの想いから、見よう見まねで始めました。

仏像はいきなり彫れる物ではなく、右手と左手を10個ずつ彫ることから始めます。そうするうちに木や道具の扱い方が身に付いてきます。「仏像を作るまでには辛抱がいるな。でもそれを越えると感慨もひとしおなんだよな」と、林田さんは懐かしそうに話します。

現在は、仏像だけでなくレリーフ、独楽（こま）、ガリガリトンボなども自宅工房や公民館の教室で作っています。

「今の子どもは、パソコンやゲーム機等で遊ぶ事が多い。それもいいけど人間は自然そのもの、木や竹で作った物などで自然を感じて遊んで欲しい。その中で生き方や人との接し方がいつのまにか身に付くよな」と林田さん。そんな想いから生涯学習フェスティバルや福祉ふれあいまつり等に作品を出品し、独楽回しやガリガリトンボを通じて来場した子ども達とふれ合っています。

「木彫をやって良かったことは？」との問いに、「一つできあがっても、次は何を作ろうか、今度はどういう物にしようかと絶えず考えて楽しいな。」と話してくれました。

自然を感じながら自然と共に生きている林田さんの笑顔はとてもかがやいています。

▲心をこめて

▲黙々と

▲独楽とガリガリトンボ

かがやく No.33 感動人生！ ここに生きる元気な入間人（ひと）

■ふるさと伝承研究会 冨田博之（とみた ひろゆき）さん（67歳）（黒須）
方言で伝えるふるさとの昔話

冨田博之さんが入間周辺の方言について興味を抱いたのは、定年退職を迎えこれから何をしようか模索していた時でした。近所のおばあさんと話していた時、ふいに『つんむす』という言葉が出てきたそうです。「当時は、話しの流れからも何を言っているかつかめず、おろおろしたことをよく覚えています」。

そのとき、昔旅役者をしていた頃の経験がふと頭に浮かびました。「あの時の『つんむす』で入間の言葉にのめりこみました。旅の役者をしていた時、色んな地方をまわり、その土地土地の無骨ながら温かな言葉に出会いました。役を演じながら言葉の響きや話し方などを研究したりと、そんな時の経験が頭をよぎったんです」。

入間周辺の方言を研究し始めた冨田さんは図書館や博物館へ通いました。そこで入間や狭山の昔話を集めた、今坂柳二さんの本と出合います。冨田さんは今坂さんのもとに通い指導を請い、多くを学んだそうです。

現在、冨田さんは、今坂さんや仲間と一緒に公民館で朗読会を開催したり、FM茶笛で方言を使って昔話を読み語りしたりしています。

「親やその前の世代から語り継がれてきた、一般庶民の生き方や想いをおろそかにしてはいけないと思うんです。そんな気持ちで毎回何度も読み合わせをし、ふるさとの言葉に近づくように練習を重ねています。これからも、多くの人たちに生の方言で昔話を伝えていきます」。

熱い想いを話してくれた冨田さんの、これからのご活躍を期待しています。

▲読み合わせの最中

▲ふるさとの昔話の数々

＊「親やすす」という意味

■折り紙 渡部カツ子（わたべ かつこ）さん（上藤沢）
頭の中は折り紙でいっぱい

「わあ！！きれい！」

思わず見とれてしまうほどに見事な折り紙の数々。バラの花、傘、くす玉、金魚、小箱、タペストリーなどなど。

毎月、第1・第3月曜日の午後、上ノ原ふれあい会老人憩いの家で折り紙教室を開いている渡部カツ子さん（76歳）は、寝ても覚めても折り紙のことが頭から離れない大の折り紙好きです。一度折ったら忘れないし、一日中折っていても飽きない、という折り紙歴17年の持ち主です。

そんな彼女が折り紙を始めたのは、市外の図書館で働いている頃でした。館内に飾られている折り紙を見て感動し、「私も折りたい！」の一心からその主を探し当てたら、日本折り紙協会の講師の資格を持った同じ図書館の職員でした。その後、その人から毎日お昼休みに教えてもらいました。

定年退職後、渡部さんをよく知る友人・知人や近所の人たちから「折り紙を教えて欲しい」という声が多数あがったので、自身も所属している老人会を中心に指導を始めました。折り紙教室の評判は徐々に広がっていき、今では自分の折り紙教室以外にも色々なところに出張して教えています。

「大人にも子どもにも喜ばれる折り紙を、これからもあらゆる所に広めていきたい」と抱負を語っていました。折り紙を通して、人と人とのふれあいを大事にされている渡部さん、いつまでもお元気でご活躍ください！

▲今日は上手に折れるかな

▲見事に折られたバラの花

▲色あざやかなくす玉の数々